

2月1日午前 2科4科入試

**国語****【出題の狙い】**

一説明文（岡崎雅子『寝ても覚めてもアザラシ救助隊』）は、アザラシ保護施設で働く著者が保護活動の現状や、そこから見えてきた問題について記した文章です。アザラシと人間が共存できる環境について、筆者の考えを文章全体から上手く把握する必要がありました。作問に際して問二で語彙力、問六は文章を踏まえたグラフの読み取り、他の問題で文脈把握の力を見ています。

二物語文（青山美智子『猫のお告げは樹の下で』）は、さまざまな「先生」との関わりのなかで、自分の想いや存在こそが「真ん中」だと気づき、クラスメイトと対等に接することができるようになっていく少年「和也」の成長の物語です。いつも自分は「端っこ」にいると感じている「和也」の心情が推移していくプロセスを、時制の前後を判断して読解する力が問われています。問三は比喻表現の理解、問四と問六は、「和也」が自問自答しながら、答えを導き出す道筋を辿る読解です。

**【結果講評】**

一傍線部周辺を読み取る問題は、正答率が高かったです。一方で文章全体を理解する力においては差が見られ、主観的に読解してしまうことで、文中根拠を見落とし、正しい選択肢を選べなかった解答もありました。

二選択問題はおおむねよくできていました。記述問題では、問いの意図を理解できずに傍線部の直前直後の文章のみを根拠として記述している解答が多く見られました。

**【差がついた問題】**

一問六グラフの読み取り問題は、文章内容に適したグラフを選択する問題でした。言葉で書かれている事柄をデータとして把握する力が問われ、これまでに学んできた知識も読解に役立ったといえます。最後の記述問題は設問に「二つの要素を踏まえて」という指示があり、文章全体をしっかりと読んだ上で、解答をまとめられているかどうかで差がつかしました。

二問八の記述問題は、教室で給食を食べられるようになったきっかけを正確に読み取れているかどうかで大きな差がつかしました。「山根先生」からの手紙がきっかけだとする誤った読み取りが多くありました。「和也」の「すとん、と何かが心の奥に着地した」という心情表現が読解のカギになります。傍線部直後だけでなく、時制をたどりながら主人公の心情の変化を読み取る読解、必要な語彙を入れて60文字以内でまとめるという記述の両面の力が問われます。

**【次年度以降の受験生に向けて：指導される先生へ】**

本校の入試では説明的な文章と小説・随筆のなかから、子どもたちの精神の成長につながるような問題文の選定を心がけています。国語の作問においては「基礎的読解力」をはかるうとしております。ここでいう「基礎」とは、主観に引きずられて読めたつもりになってしまう自分を、文中の根拠をたどりながら客観的・批判的に内省しようとする姿勢と能力です。この力は「要約」や「意見文作成」のトレーニングが有効と考えます。さらに言えば、限られた時間内に正確な読み取りができることは、入試の枠を超えて大切な「生きる力」であると私どもは考えており、今後も入学後の授業につながる「入試問題」を作成してまいります。

2月1日午後 特待入試

## 国語

### 【出題の狙い】

一説明文（山鳥重『「わかる」とはどういうことか—認識の脳科学』）は、時間や場所、空間や仕事などさまざまなものに見当をつけるうえで、どのようなことが必要かについて述べた文章です。話題の切り替わりや指示語などをふまえながら、筆者の主張を読みとり、まとめる力を問いました。

二物語文（重松清『はるか、ブレーメン』）は、3歳で突然母から捨てられた主人公が、病気で入院している母親から「会いたい」と連絡を受けたことをきっかけに再会を果たしたことで、失われた親子のきずなを取り戻す物語です。登場人物達の描写から心の機微を読みとり、主人公「はるちゃん」の気持ちの変化をとらえることができるかを中心に出題しました。

### 【結果講評】

一文章を理解するために必要な語彙・指示語・比喻表現・主張を選択形式で問うとともに、記述問題では60字の説明問題を出題しました。長い文章を時間内に理解し、粘り強く取り組む解答が多かったです。漢字と接続詞、ことわざを選ぶ問題はよくできていましたが、問八の抜き出しの問題は難しかったようです。

二登場人物同士の会話を中心に物語が進んでいく中で、そのセリフに含まれている複雑な気持ちや背景を理解するのが、やや難しい文章でした。そのため、その道筋を丁寧にたどれたかどうかで得点の差がつかしました。問二や問三などの語彙問題では正答率が低かったです。

### 【差がついた問題】

問六の話題が移り変わる部分を見つける問いが難しかったようです。問十の記述は「見当をつける」ために必要な要素をまとめるもので、要素をみれなく見つけて60字以内で簡潔にまとめられたかどうかで差がつかしました。

問十の記述問題は、2か所の傍線部を比べてその心情の変化のプロセスを問う問題でした。気持ちに関する表現が複数ある中でどの表現を抜き出すか、あるいは明確に書かれていない中で文脈からどう読み取るか、それらの違いが得点の差となります。文中表現を傍線付近から安易に抜き出して答えることによって、正解の条件となる要素が満たされず減点となるケースが多く見受けられました。

### 【次年度以降の受験生に向けて：指導される先生へ】

本校の入試では説明的な文章と小説・随筆のなかから、子どもたちの精神の成長につながるような問題文の選定を心がけています。国語の作問においては「基礎的読解力」をはかろうとしております。ここでいう「基礎」とは、主観に引きずられて読めたつもりになってしまう自分を、文中の根拠をたどりながら客観的・批判的に内省しようとする姿勢と能力です。この力は「要約」や「意見文作成」のトレーニングが有効と考えます。さらに言えば、限られた時間内に正確な読み取りができることは、入試の枠を超えて大切な「生きる力」であると私どもは考えており、今後も入学後の授業につながる「入試問題」を作成してまいります。